

自然遊学館 だより

2002 春号 (No.23)

2002.4.5

市民の森で採集されたウスグモスズ

貝塚市二色の市民の森において、2001年の8月6日、8月25日、9月22日の夕方から、講師にあやめ池自然博物館の河合正人さんを迎えて、「鳴く虫の声を聞く会」を開きました。自然遊学館多目的室で持参された標本や自作の模型を使って、バッタ目の発音の仕組みやコオロギとキリギリスの鳴き方の違いを教えてもらった後、市民の森に参加者ととともに繰り出し、鳴く虫の声を聞きました。以下に前号の遊学館だよりにおいて報告していなかった8月6日と8月25日に鳴き声を聞くことができた種を紹介します。

(8月6日)

コオロギ科 ツヅレサセコオロギ、
ハラオカメコオロギ、ミツカドコオロギ、
エンマコオロギ、アオマツムシ、
ヒロバネカントン、キンヒバリ、
マダラスズ、シバズ

カネタタキ科 カネタタキ

(8月25日)

コオロギ科 ツヅレサセコオロギ、
ハラオカメコオロギ、ミツカドコオロギ、
エンマコオロギ、アオマツムシ、
ヒロバネカントン

カネタタキ科 カネタタキ

鳴く虫の代表はコオロギ科とキリギリス科ですが、河合先生の話によると、造成された空き地に最初に侵入してくるのはコオロギ科であり、市民の森にもこれからキリギリス科も侵入してくる可能性があるそうです。

市民の森の鳴く虫の声を聞く行事は今年度が初めてなのですが、当館では名越千石荘においてこれまで毎秋に鳴く虫の声を聞く行事を開催してきました。千石荘ではキリギリス科の鳴き声も聞かれ、それに比べて市民の森は寂しい感じがしましたが、種類が少ない分、それぞれの種の鳴き声を覚えやすいかな、という感じもしました。

また、8月6日に鳴く虫に混じって、見慣れない小さなコオロギがシャリンバイ上で採集されました。鳴き声は聞かれませんでした。河合先生はおそらくウスグモスズだろうと言われ、市川顕彦氏にも同定の依頼していただき、ウスグモスズだと確認されました。この種は体長約5mmで、都市公園などに多いようですが、これまでの貝塚市内のバッタ目の調査では確認されていませんでしたし(宮武、1994; 岩崎・小田、1996)、遊学館にも標本は1個体もありませんでした。8月25日に再び♂2個体♀1個体が採集され、当館の所蔵標本としました。

(岩崎 拓)

琉球のカニ切手

1969年、当時アメリカの統治下であった琉球（現、沖縄県）でカニの切手が発行されました。南国沖縄の海岸にはマングローブやサンゴ礁の砂浜が広がり、生息しているカニの種類も多く、人々に親しみ深い生きものであるため、切手の図案になったものと思われます。



ツノメガニ

学名：*Ocyropsis ceratophthalma*
(スナガニ科)

眼から角が生えているなんとも恐ろしげなカニ。しかも砂浜を走るスピードは、子供では捕獲できない程のカニ界きっての俊足の持ち主である。



ミナミコメツキガニ

学名：*Mictyris brevidactylus*
(ミナミコメツキガニ科)

徒党をなしてマングローブ干潟を群れ歩く

ことから、軍隊ガニの異名をもつ。カニといえば横歩きという常識をくつがえし、前にも歩ける変わり者である。潮が満ちてくるとスクルーのように体を回して砂の中に潜る。



リュウキュウシオマネキ

学名：*Uca coarctata*
(スナガニ科)

近木川河口の人気者ハクセンシオマネキと同じ仲間（同属）。沖縄に生息するシオマネキの仲間は8種が知られる。オスのハサミ脚のどちらかが巨大化する。



ヤクジャマガニ

学名：*Baptozius vinosus*
(オウギガニ科)

八重山民謡のヤクジャーマ節に登場する大型のカニ。顔の様子が、歌舞伎役者のくまどり化粧のようなのでクマドリオウギガニともよばれる。

*これらの切手は河野洋さんが収集しました。

(山田浩二)

河口バードウォッチングと二色の浜に打ち上げられた貝類調べ

2月23日午後1時より、快晴の下、近木川河口においてバードウォッチングと貝類調べの行事を行ないました。鳥類の講師は大阪市立自然史博物館の和田岳先生、貝類の講師は日本貝類学会の児島格先生、参加者は遊学館スタッフを含めて23名でした。遊学館を出発して近木川河口でバードウォッチング。海に浮いているカワウ、海辺でくつろぐヒドリガモの群れ、せわしなく飛び回るカワラヒワなどを観察しました。その後、左岸の河口干潟と二色の浜で打ち上げられた貝類を拾いました。3時半に採集を終え、館に戻り、まずは和田先生の話から。

カンムリカイツブリ、カワウ、コサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オカヨシガモ、ミサゴ、ユリカモメ、セグロカモメ、ドバト、ハクセキレイ、モズ、ツグミ、メジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス

以上の20種が観察されたが、河口で20種は少ないとのこと。また、採集した鳥の羽毛からは、よほど大きさや色に特徴があるものでないと種の判別ができないという話を聞きました。

次に、児島先生から貝の種を教えてもらいました。拾った貝の中には、大阪湾に元々生息するものと二色の浜の養浜の際に瀬戸内海の他の場所から持ち込まれたものがあるという話を聞きました。途中で、

クイチガイサルボウガイの缶詰を参加者全員で試食しました。缶詰にはアカガイというラベルが貼ってあるのですが、実はアカガイではなくクイチガイサルボウという種だそうです。

以下に行事の当日と2月18日に自然遊学館スタッフが下見に行った際に採集した貝類の種名を記します。

(二枚貝)

フネガイ科 サルボウガイ、コベルトフネガイ、トマヤガイ、ヒメエガイ、ササゲミミエガイ、ハイガイ
イガイ科 ムラサキイガイ、ミドリイガイ、ホトトギスガイ

ハボウキガイ科 タイラギガイ

イタボガキ科 マガキ、ナガガキ、イタボガキ

ザルガイ科 トリガイ

バカガイ科 バカガイ、ホクロガイ

ニッコウガイ科 ゴイサギガイ、ヒメシラトリガイ

マルスダレガイ科 カガミガイ、アサリ、オニアサリ、ウスカラシオツガイ、マルスダレガイ、オイノカガミ、サザメガイ

オオノガイ科 オオノガイ

クチベニガイ科 クチベニガイ、クチベニデガイ

ナミマガシワガイ科 ナミマガシワガイ

キクザルガイ科 キクザルガイ

ウミギクガイ科 チリボタンガイ

モシオガイ科 スダレモシオガイ

イタヤガイ科 イタヤガイ、アワジチヒロ、アズマニシキ、ヒナノヒオウギガイ

(巻貝)

ニシキウズガイ科 コシダカガンガラ
カリバガサガイ科 シマメノウフネガイ
タマガイ科 ツメタガイ、ネコガイ、
アダムスタマガイ
アッキガイ科 アカニシ、レイシガイ
カラマツガイ科 カラマツガイ
リンゴガイ科 スクミリンゴガイ (淡水)
タモトガイ科 ムギガイ
オリイレヨフバイ科 ムシロガイ、
アラムシロガイ
ムカデガイ科 オオヘビガイ

(その他の打ち上げ採集物)

軟体動物 コウイカの甲
棘皮動物 ヒトデ、オカメブンプク、
ハスノハカシパン
甲殻類 キンセンガニ、タイワンガザミ
イソガニ、ケフサイソガニ、モクスガニ、
ケブカヒメヨコバサミ、
オオアカフジツボ
環形動物 カンザシゴカイの一種

(山田浩二・岩崎 拓)

飼育展示している昆虫

現在、常設のケージでは、ツシマカブリモドキ、オオクワガタ、ヒラタクワガタ、ツチイナゴ、イシガキモリバッタ、サツマゴキブリ、カマキリを飼育しています。ツシマカブリモドキとイシガキモリバッタは、今年の10月に樫原市昆虫館から頂いたものです。

メタリフェルホソアカクワガタという外産のクワガタも同時に頂いて展示していた

のですが、こちらは今年の2月に寿命が尽きてしまいました。昼間はマットの下に潜ってしまうオオクワガタやヒラタクワガタと違って、メタリフェルのオスは、昼間でも夜でも、朽木の上にセットした餌のまわりで「あたりを睥睨するようかのように」姿をみせていたので、展示に向いていると思ったのですが。

ツシマカブリモドキは長崎県の対馬にのみ分布するオサムシ科の美麗種です。鳥のささみとリンゴで飼育できると教えていただいたので、そのように飼育しています。オサムシ科は元々独特の臭いを持っているのと、ささみとリンゴを毎日交換できないので、ケージの周りは少し臭いが漂っているかもしれません。

イシガキモリバッタは南西諸島に分布するモリバッタの中で、石垣島に分布する一亜種です。黄、白、黒、赤、青などの色が混じった派手な体色をしています。暖かい地方のバッタなので大阪の冬を越せるのかなと心配していたのですが、現在も生きています。餌としてアラカシの挿し木を入れていますが、摂食しているのをはっきりとは確認できていません。

その他、クワガタムシはマットの中に潜り込んだままで観察できず、ツチイナゴは1個体のメスがケージ上面に張り付く、サツマゴキブリとオオゴキブリはあまり姿を見せず、卵囊で越冬したオオカマキリは、館内が外より暖かいために3月にふ化し始め、サツマゴキブリのケージの中には、一般家庭でも見られるクロゴキブリが侵入して餌を掠め取っているといった状況です。展示説明の写真を見て、サツマゴキブリ・オオゴキブリと見間

違わないようにしてください。

奥の棚のため池の生き物水槽では、クロスジギンヤンマ、コオニヤンマのヤゴとコオイムシ属の一種があまり動かずにじっとしています。コオイムシは、堀大池で採集したものです。コオイムシは、まだ解剖して交尾器を観察していないので、コオイムシかオオコオイムシなのかは不明です。

他に、現在は展示していませんが、夏の展示に向けて倉庫の中でカブトムシの幼虫を飼育しています。また、「オオクワガタ飼育のすべて」(むし社)の著者である森田紳平さんから昨年の10月に頂いたオオクワガタを3ペア飼育してます。こちらの方は採卵が今年になるので、ケージで展示できるのは、来年になると思います。

(岩崎 拓)

「近木っ子あつまれ」行事報告

2002年3月23日午後1時より、当館多目的室において今年1年の近木っ子探険隊としての活動を振り返る「近木っ子探険隊成果発表会」を行いました。司会は高校生の矢倉幸代、松崎至道、鈴子達也の3名。



まず、年間最多行事参加者として鈴子勝也君らを表彰した後、各自の成果発表を行いました。発表タイトルは以下のとおりです。

市原唯里 レッドテールキョウの飼育

岡田恵太郎 クワガタ採集

鈴子勝也 バードウォッチング

岡田真太郎 ザリガニ釣り

山下だいすけ 水辺の楽校

中村愛 トンボ池・バードウォッチングなど

吉田みほ プールのヤゴ調査

吉田ゆうき トンボ池

武井夏樹・塩川隼平・佐々木理明

ヨコヤアナジャコとマゴコロガイ

高野晴一郎 貝ひろいと化石採集

高野朝子 貝ひろいと化石採集



最後に、遊学館職員が撮影した動物の画像から作った神経衰弱(カードゲーム)を子供たち全員で楽しみました。なお、この行事の様子は、ケーブルテレビ、J-COMりんくうの番組で紹介される予定です(4月23日~5月6日)。

(岩崎 拓・山田浩二)

飼育展示しているヤマナメクジ

自然遊学館では標本だけでなく、いろいろな生体を飼育展示していますが、その中で地味な存在（グロテスクな存在!？）では3本の指に入るヤマナメクジの紹介をします。このヤマナメクジ2匹は、2001年11月2日に貝類に詳しい児嶋格さんが、水間寺の石垣で採集したものです。みなさんの家のお庭などでお馴染みのナメクジよりも、ひとまわり以上大きく、よく眺めると背中にはきれいな模様もあります。

ナメクジの仲間（ナメクジ科）は、でんでんむしや、かたつむりの愛称で知られているマイマイのグループ（マイマイ目）に属し、日本に生息するのはこれらの2種、ナメクジ *Meghimatium bilineatum* とヤマナメクジ *Meghimatium fruhstoferi* だけが知られています。

飼育環境は少し薄暗くして、底には濡れたペーパータオルを敷いています。エサはリンゴなどの果物や、館の周りに生えている雑草を与えています。



ヤマナメクジ（実寸大）

また、ナメクジの話題といえば、二色パークタウンに住む中学生の寺田拓真君が、留学先のアメリカ合衆国オレゴン州で見つけたコウラナメクジ科の写真を撮って送ってくれました。このナメクジは名前の通り、背中に殻があります。写真の矢印の箇所に穴が開いていると寺田君は報告しています。この穴は気孔と呼ばれ、ここを通して呼吸しています。

このコウラナメクジの仲間はヨーロッパ原産で、世界中に広くひろがり日本にも何種類かが生息しています。



アメリカ産コウラナメクジの仲間
（硬貨は1セント銅貨）

（山田浩二）

自然遊学館だより 2002 春号 (No. 23)

発行日 2002. 4. 5

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 0724(31)8457

Fax. 0724(31)8458
